

佐賀市 40 歴史探訪

そう かん とう じん まち 宗歆と唐人町

今回は、佐賀駅南にある唐人町とその地に関連が深いとされる宗歆について紹介します。

ごようとうじんまちあらものからものやしよくごゆいしよかき
『御用唐人町荒物唐物屋職御由緒書』によると、『宗歆は高麗国吉州の生まれで、天正15年(1587)に突然の暴風雨に遭い筑前国黒崎に漂着した後、大宰府参詣に立ち寄った龍造寺家晴と成富兵庫茂安と出会い、連れられて佐賀を訪れた。彼らの仲介で鍋島直茂と面会した宗歆は、姓を名乗ることを許され、直茂に召し抱えられることになった。文禄・慶長の役(1592～1598)の後、慶長4年(1599)に、宗歆は海外貿易の御用商人の資格を与えられ、十間堀川北岸の地に居を構えることを許された。直茂はこの地を、宗歆の生地になんで「唐人町」と名付けた。』ということが記されています。

その頃から、この地には商人をはじめさまざまな人が集まるようになり、町は次第に発展していったようです。別の記録をみると「唐人町」は当初、神野村の一部であったようですが、正保年間(

1644～1647)には佐賀城下へ編入されており、承応3年(1654)の佐賀城下絵図には「唐人町」以外にも「(唐人)寺町」、「唐人新町」の地名がみえ、寛政年間ころ(1789～1800)には佐賀城下三十三町の中にその三つの名前が入るまでになっていることなどからも、その発展ぶりがうかがえます。

今では町並みも変わり、江戸時代の趣はずいぶんと失われている現在の唐人町ですが、縁が深いとされる宗歆やその一族をしのぶものとして、唐人碑や彼らの墓が今でも大切にされています。

一口メモ

■唐人碑は、唐人町会館前の唐人神社(唐人一丁目)祠内に、宗歆一族の墓は浄土宗鏡円寺(唐人一丁目)

にあります。

■『御用唐人町荒物唐物屋職御由緒書』は宗歆の子孫という鍋島藩御用荒物屋の川崎勘四郎が天保13年(1842)に佐賀藩に差し出した文書です。

■宗歆が生まれたとされる吉州は、現在の朝鮮民主主義人民共和国咸鏡北道吉州郡にあたると思われます。



▲鏡円寺



▲宗歆の墓



▲唐人神社

